文化財こうち

第３号

平成２９年３月３１日
高知県教育委員会
文化財課

四国霊場八十八箇所札所寺院の清瀧寺（きよたきじ）から青龍寺を結ぶ遍路道。土佐市塚地から宇佐にかけての、峠の道は古来より人々の往来が絶えず、今なお、お遍路さんや登山を楽しむ人々の姿が見られます。この古道が「土佐遍路道青龍寺道（とさへんろみちしょうりゅうじ）」として国の史跡に指定されました。

【新指定の文化財】
1. 国指定史跡「土佐遍路道青龍寺道」…… 2
2. 県指定天然記念物
「白髪山八反奈路根下がりヒノキ群生地」…… 3
【埋蔵文化財】
3. 史跡土佐国分寺跡 －寺域を示す溝跡の発見－ …… 4
4. 秦泉寺廃寺跡 －古代寺院関連の遺構と遺物を確認－ … 5
5. 柳田遺跡 －弥生時代の集落跡を確認－ …… 6
6. 入野城跡 －茶の湯と中世土豪－ …… 7
7. 若宮ノ東遺跡 －弥生時代の大規模集落－
高田遺跡 －弥生時代の集落と古代の建物群－…… 8
8. 埋蔵文化財センターの広報普及活動 …… 9
【重要文化財】
9. 重要文化財　木造菩薩坐像
吾川郡仁淀川町養花院所蔵…… 10
【天然記念物】
10. 古代から受け継ぐ日本鶏
－天然記念物・土佐地鶏－ …… 11
【重要文化的景観】
11. 津野町の文化財
－吉村虎太郎邸と芳生野集落の原風景－…… 12
【その他の文化財】
12. 岡本弥太関係書簡大量に見つかる
－弥太没前・没後期の一級資料群－ …… 13
13.第58回中国四国ブロック民俗芸能大会 …… 14
14. 文化財トピックス …… 15

裏表紙　掲載文化財位置図…… 16

1. 国指定史跡「土佐遍路道青龍寺道」

四国遍路を世界遺産に

四国遍路は、空海（弘法大師）ゆかりの地を巡る全長 1,400㎞に及ぶ壮大な巡礼路であり、修行僧が四国中の聖跡を巡ったのがはじまりとされています。江戸時代になると、交通手段の発達に伴い、僧による「修行」としてだけではなく、「巡礼」として、一般の人々にも普及するようになりました。そして、17 世紀の後半に真念が出版した案内本『四国遍路道指南』によって広まり、現在まで広く人々の間で継承されてきました。地域住民の「お接待」を受けながら、国籍や宗教を超えて誰もが「お遍路さん」になりうるという、世界に類を見ない巡礼文化であり、四国 4 県は四国遍路の「世界遺産」への登録を目指して、様々な取り組みを行っています。

そうした取り組みの成果の一つとして、平成 28 年 10 月には、土佐市塚地の遍路道（塚地坂）が国史跡「土佐遍路道青龍寺道」に指定されました。

写真１　道しるべ

土佐遍路道青龍寺道

指定された区間は、35 番札所清瀧寺から 36 番札所青龍寺に向かう道の途中の約 1.6㎞からなる峠道で、開発を免れた昔ながらの風景を保つ数少ない遍路道のひとつであり（表紙写真）、道しるべ（写真１）など貴重な石造物が数多く残されていることでも知られています。

峠を宇佐側に下る途中の大岩に彫られた磨崖仏（写真２）の形態やその他の調査から、道の歴史は少なくとも中世にさかのぼると考えられており、明治ごろまでは宇佐の港から高岡や高知城下へ新鮮なカツオを届ける行商ルートとしてもにぎわっていました。現在では、トンネルの開通により歩いて越える必要はなくなりましたが、塚地坂に残された道しるべや、道半ばで行き倒れた巡礼者の墓標（写真３）からは、当時の人々の遍路にかける情熱や、日々の暮らしぶりが伝わってくるようです。

土佐市教育委員会　坂田　慎吾

写真２　磨崖仏

写真３　遍路墓標

2. 県指定天然記念物
「白髪山八反奈路根下がりヒノキ群生地」

白髪山について

白髪山（しらがやま）は本山町の北部にあり、四国山地石鎚山系の標高 1469 mの山で、県立自然公園に指定されています。また、広い範囲でヒノキの自然林が成立していることで有名です。

白髪山のヒノキといえば、長宗我部元親の時代には土佐銘品の一つとして豊臣秀吉に献上されていた歴史を持ちます。その後、土佐藩第２代藩主山内忠義の財政難の時代には、借銀が２千貫（現代の金額で約 18 億円）に達していましたが、白髪山の質の良いヒノキ材を売却することにより、この借銀を僅か３年で完済し、さらに余った銀を御銀蔵に納めたともいわれています。

白髪山全景

八反奈路の根下がりヒノキ

八反奈路は、白髪山の南西斜面、標高 1050 ～ 1250 mに位置しており、巨岩が堆積しています。これに隣接した斜面上部から中腹にかけての土壌の堆積した適湿地には気候的極相であるブナ－ヒメシャラ群落、谷部の湿潤地にはケヤキやトチノキが優占する落葉広葉樹林が成立しています。また、巨岩堆積地に成立したヒノキの自然林は他に類を見ないほど高密度の巨木を含んでいます。このように、八反奈路は地域を特徴づける複数の自然林が良好な状態で残された多様性の高い極めて貴重な場所です。

その八反奈路に群生する「根下がりヒノキ」は、たこ足状に根が地面から立ち上がり、その上に巨幹がそびえるという一風変わった樹形をしています。これは、幾世代にもわたり切り株や倒木の株の上で天然更新が繰り返されて現在の姿をとどめるに至ったと考えられ、「根下がりヒノキ」が形成されるプロセスを観察できる生態学上貴重な林相であるともいえます。

本山町まちづくり推進課　秋山　恵美

モニターツアーを開催

群生する根下がりヒノキ

3. 史跡土佐国分寺跡 －寺域を示す溝跡の発見－

調査にいたる経緯

土佐国分寺は、天平 13（741）年に聖武天皇の「国分寺建立の詔」を受けて国ごとに建てられた古代寺院の一つで、現在の四国霊場第 29 番札所国分寺を中心とした範囲が大正 11 年 10 月 12 日に高知県で初めての国の史跡に指定されました。ところが、僧房（僧侶の宿舎）跡が史跡範囲外に広がると分かったため、範囲の見直しが必要になりました。そこで、南国市教育委員会は史跡土佐国分寺跡の寺域を確認するため、今回は南北に長い調査区を史跡範囲北側の水田に設定して発掘調査を行いました。

２条溝跡

溝跡の土器出土状況

寺域確認調査の成果

今回の成果で特に重要なのが、平安時代前期頃（約 1100 年前）の平行した２条の溝跡が見つかったことです。この溝跡は、土地が一段高くなっている範囲の縁辺部で見つかりました。これらは古代国分寺の寺域を区画する溝と考えられ、これにより南北約 135m と考えられていた古代国分寺の寺域は南北約 200m もの広い範囲であったことが明らかとなりました。その上、現在の地形が古代国分寺の寺域をある程度反映しているとも考えられ、今後調査を行う際の目安にできそうです。

このほかにも、国分寺が創建される以前の時代のもので弥生時代終末期（約 1800 年前）と古墳時代後期（約 1400 年前）の竪穴住居跡が合計 6 棟確認できました。

また、国分寺創建から鎌倉時代、室町時代、戦国時代にいたるまでの様々な遺構遺物も確認されました。これにより、これまであまり明らかとなっていなかった時代の姿が垣間見えてきました。

まとめ

今回の調査は古代国分寺の姿を明らかにするためのものでしたが、国分寺の空白期間を埋める貴重な成果となりました。古代の寺域の北限が明らかになり、この地域の長い歴史の痕跡を確認することができました。南国市教育委員会では、今後も調査を進めていき、史跡土佐国分寺跡の謎を解明していく予定です。

南国市教育委員会　山﨑　美希

4. 秦泉寺廃寺跡 －古代寺院関連の遺構と遺物を確認－

境界の溝

秦泉寺廃寺跡は高知市北部の秦地区に所在しており、昭和 50 年以降、６次にわたる発掘調査が実施されています。本年度の調査区では、飛鳥時代から奈良時代（７～８世紀）の掘立柱建物跡、溝、土坑、小型の穴などの遺構を検出しました。

調査区東部で検出した南北方向の溝 SD ２～４は、幅 1.6 ～ 2.4m の大型の溝です。東部では７～８世紀にかけて３条の溝が繰り返し掘られ、西側に軸方向が一致する掘立柱建物群のエリアがあることから、これらの溝が敷地の境界の役割を果たしていたと推察されます。溝内には多量の古代瓦が廃棄されており、寺院に関わる瓦葺きの建物が近くに存在していたと推定されます。

建物群と寺院関連の遺物

調査区の西部では複数の掘立柱建物跡と溝を検出しました。東西方向の溝からは８世紀前半頃の須恵器（すえき）・土師器（はじき）とともに、赤彩（せきさい）、土師器、僧侶に関わる鉄鉢形鉢（てっぱつがたはち）や硯（すずり）などの遺物が出土しており、掘立柱建物など小規模な建物が多く分布する西側のエリアが、僧房（僧侶の居住空間）であったと考えられます。

今回出土した円面硯（えんめんけん）は獣脚（じゅうきゃく）や蹄脚（ていきゃく）（馬の蹄（ひづめ）の形）などの脚をもつタイプとみられ、県下出土の円面硯のうちでも古い時期のものにあたります。

この他、古代の堆積層からは、素弁八葉蓮華文軒丸瓦（そべんはちようれんげもんのきまるがわら）も出土しています。

高知市教育委員会　浜田　恵子

秦泉寺廃寺跡　調査区全景

瓦出土状況（北西より）

素弁八葉蓮華文軒丸瓦

5. 柳田遺跡 －弥生時代の集落跡を確認－

弥生集落の広がり

柳田遺跡は高知市西部の朝倉地区に位置しています。北の鏡川と南の神田川の間に挟まれたこの地は、かつて、東の浦戸湾方向へ蛇行しながら流れる幾筋かの河川があった場所と考えられます。遺跡は平成４年度に本格的な発掘調査が行われ、弥生時代後期～古墳時代前期の河川跡を始め、縄文時代後期から古墳時代前期の各時期の遺構・遺物が発見されています。今回の調査地は、前回調査で弥生時代前期末～中期前半の遺構が見つかった場所と、国道を挟んで南側に隣接しています。調査の結果、前回調査に続き、弥生時代前期末～中期前半の生活面が見つかりました。多数の土坑とピットの他、竪穴住居とみられる遺構を２基確認し、南側に集落が広がっていることが新たに確認できました。

柳田遺跡全景

集落の様子

竪穴住居跡は調査区中央部の北から南に緩やかに傾斜する地形の上で見つかりました。円弧状を描くように穴が掘られ、中からは炉跡とみられる施設も見つかりました。土坑は前回調査で見つかったものと特徴が似ており、多量の炭化物や、焼けた土などで埋まっていました。土坑の中からは、多くの弥生土器と共に、魚などの食物の残骸とみられる細かく砕けた骨も出土しています。他にも、当時の地面では焼けた土や炭化物が集中する箇所が見られたことから、当時の人々がこの地で生活を営んでいたことが窺えます。遺跡内からは、壺や甕（かめ）などの弥生土器の他、石器も出土しています。石器は、石庖丁、石鏃、石斧などが見つかっています。これらの出土遺物から、当地周辺で農耕や狩猟などが行われていた可能性があり、今後は周辺での水田の発見が期待されます。また、調査区の南側では、地形がさらに低くなり、遺構の数が減ることから、集落の南端に近い場所であることもわかりました。

高知市教育委員会　永田　由香

石庖丁　出土状況

竪穴住居跡

6. 入野城跡 －茶の湯と中世土豪－

黒潮町では現在、国道 56 号（大方バイパス）の道路改良工事が進行しています。

入野小学校西側の丘陵一帯は、町の宅地造成工事など開発工事の計画地となり、平成 22 年度に埋蔵文化財試掘確認調査を行ったところ、入野城跡（中世城跡）に関連する遺構や遺物が残存していることが明らかになりました。このため昨年 10 月中旬から事前の発掘調査を実施しました。

入野城跡は、黒潮町入野の中央部、国道北側の標高 26m 前後の小高い丘に所在し、東側には町道を挟んで入野小学校や大方高校と隣接しています。城跡周辺は「城山」と呼称され、古くからこの地域の土豪であった入野氏の居城と伝えられていました。

入野氏は、鎌倉時代後半頃から頭角を現し、室町時代になると鹿持川（かもちがわ）河口部の開拓などにより、さらに勢力を伸ばして周辺地域を支配する土豪へと成長したと考えられています。

また、入野松原近くの浜の宮に加茂八幡宮を勧請するなど、入野集落発展の土台を築きましたが、一条氏の土佐入国と幡多荘管理の圧政化により次第に力をそがれ、永正 17 年（1520）頃には没落したとみられます。

一方で、一条氏家臣の敷地藤安（しきじ ふじやす）（四万十市川登塩塚城跡城主）と入野家重（いりの いえしげ）との争いは有名で、三原村に伝わる椿姫の悲話と共に、各地に伝承が伝えられています。

入野城跡の調査では、北側の主要な郭である詰と、南側の曲輪（くるわ）となる二ノ段を中心に遺構等の検出作業を進めました。その結果、詰部で土坑や礎石、二ノ段で礎石など、曲輪（くるわ）郭を構成する遺構の一部が検出されましたが、いずれも後世の開墾等による土地の削平が著しく、建物の配置や城跡の全体像を把握するには至りませんでした。しかし、斜面部から郭で使用された貿易陶磁器類や土師質土器（はじしつどき）等の遺物が出土し、城跡における往時の活動の一端を探ることができました。

なかでも、詰部から検出された城跡構築時の作業跡とみられる整地層や、野鍛冶跡など今後の中世城跡の研究に参考となる資料や、茶の湯の浸透を物語る風炉（ふうろ）などの出土は今回の調査で得られた貴重な成果です。

出土した土器類などから、入野城跡は 15 世紀後半から 16 世紀前半にかけて盛行し、16 世紀後半まで存続していたことが分かりました。

黒潮町教育委員会　渡邊・山本

風炉出土状況

野鍛冶跡（焼石の集石坑）

入野城跡調査区（西より）

7. 若宮ノ東遺跡 －弥生時代の大規模集落－
高田遺跡 －弥生時代の集落と古代の建物群－

若宮ノ東遺跡

若宮ノ東遺跡は南国市に所在し、弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡です。今回、都市計画道路高知南国線建設に伴い、初めて本格的な発掘調査を行っています。調査では弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての竪穴建物跡が 25 棟以上も確認され、遺構密度が高く、竪穴建物跡からは多量の遺物が出土しています。周辺の確認調査でも弥生時代の遺構が確認されており、調査が進めば小籠遺跡や祈年遺跡の様な大規模集落になるものとみられます。

古墳時代後期ではＬ字状を呈する溝跡が確認されています。この溝跡は幅約２ｍを測る大規模なものであり、集落や施設の区画である可能性が考えられます。また、この溝跡に沿うように一辺 1.2m、深さ 1.1m、柱痕径 30㎝を測る大型の柱穴が７基確認されており、全長 18m を測る県内最大級の建造物であり、集落の象徴的な建物が存在したものと思われます。これらの柱穴からは弥生土器片のみしか出土しておらず明確な時期については不明ですが、Ｌ字状の溝跡と同時期の遺構である可能性も示唆されています。

県埋蔵文化財センター　徳平　涼子

大型柱穴列

高田遺跡

高田遺跡は香南市の物部川河口近くの左岸に位置する遺跡です。北側には下ノ坪遺跡や西野遺跡群、深渕遺跡などの弥生時代から古代にかけての遺跡が所在します。

発掘調査は南国安芸道路の建設に伴い平成 27 年度から行われており、昨年度の調査では、弥生時代の集落と古代の役所に関連すると考えられる掘立柱建物群跡が確認され、遺物では、当時希少品であった愛知県の猿投産の緑釉陶器が注目されました。

今年度の調査区では、弥生時代の竪穴建物跡 1 棟と土器棺 4 基、古代（奈良・平安時代）の掘立柱建物跡 17 棟、土坑墓 1 基の他、溝跡やピット群などを確認しました。遺物は、土師器、須恵器、土師質土器など古代を中心としたものが出土しています。なかでも赤く塗られた土師器の杯や皿、刀子、硯、蛇尾（ベルトの飾り金具）、鉄製紡錘車など役人が使ったと考えられる道具類が注目されます。今回の調査により、昨年度の調査区から東側にも弥生時代の集落や古代の建物群が広がっていることが確認されました。

県埋蔵文化財センター　坂本　裕一

古代の掘立柱建物跡

出土した土器棺

8. 埋蔵文化財センターの広報普及活動
～より親しまれる“センター”を目指して～

「前はよく通るけど，どんな施設かよく知らない。」「研究機関みたいでちょっと敷居が高い感じ。」一般市民の方々から、よくこのような声を聞いてきました。そこで、ここ数年、埋蔵文化財センターでは市民の皆さんが気軽に活用し、親しみを感じられる施設となるべく、数々の広報普及活動に励んでいます。

学校機関等への出前考古学教室

地域の遺跡の授業や本物の出土文化財を活用しての展示品解説、勾玉づくりや火おこしなど、年を追うごとに要望が高まっています。平成 28 年度は、小学生との地域の遺跡めぐりや大学からの要望もあり、活動の幅が大きく広がってきています。

地域の遺跡めぐり

夏休み親子考古学教室

夏休み親子考古学教室は、夏休みの催しとして定着してきました。ここ２年間は室戸市、安芸市、本山町、須崎市、四万十町、四万十市、宿毛市に出向いています。予約開始数日で定員が埋まる日が相継ぐほどの人気ぶりです。「自由研究の手引き」も大好評です。

親子考古学教室の様子

キャラクター展開と キッズコーナーの設置

親しみやすい雰囲気づくりとして、本館のキャラクター「文蔵くん・まいちゃん」を前面に押し出した取り組みにも力を入れています。また、気軽に足を運べる場づくりとして本館ロビーに「キッズコーナー」を設けました。おかげで、児童生徒や家族ぐるみの来館者が大幅に増えました。さらに点滅式の県下の遺跡パネルやミニ展示コーナーの設営などセンター機能の充実を図っています。

県埋蔵文化財センター　茂松　清志

キッズコーナー

キャラクターとのふれあい

9. 重要文化財　木造菩薩坐像
（吾川郡仁淀川町養花院所蔵）

本像の特徴とは

臨済宗妙心寺派の養花院は、旧池川町の中心街を見渡せる場所にあります。ここでご紹介する木造菩薩坐像は、この寺で本尊として大切にまつられてきました。華麗で精緻な胸飾りや両手両足をめぐるリズミカルな天衣の表現など、細かな部分まで丁寧に造像されています。加えて、大きさは 20㎝程度、桜材を使用していると思われる点から、奈良時代後半に流行した檀像彫刻という様式で作られた像であることがわかります。

檀像彫刻は、もとは中国で生まれた仏像様式で、十一面観音に関連する経典に定められた規則に則って造像された仏像を指します。日本へは鑑真の来朝に伴って伝わったとされ、本像も鑑真来朝と近い時期に日本で造像されたと考えられています。

県内ではもっとも古い仏像の内のひとつであり、日本の彫刻表現の展開を考えるうえでも大変貴重な例であることから、平成 22 年に国の重要文化財指定されました。

京都とのむすびつき

古くから日本では仏教と神道は混ざり合って信仰されていました。しかし、明治時代になると、神道を国教化するため、神道から仏教的な要素を排除する命令が出されます。このことをきっかけとして、仏教を排斥する廃仏毀釈運動が全国に巻き起こり、高知でも多くの寺院が廃寺になりました。明治時代中ごろには再興に向けた動きがはじまりますが、その中には、京都にある寺院を高知に移すという方法で再興された寺院があります。養花院もそのひとつで、もともとは、京都の石庭で有名な龍安寺の塔頭寺院として、室町時代に建てられ、明治 25 年に現在の場所へ移されたことがわかっています。龍安寺の開基である義天玄詔（1393 年～ 1462 年）が現在の越知町出身であることも、本像と本県をつなぐ所以となったのかもしれません。

高知県立歴史民俗資料館
学芸員　那須　　望

胸飾部分拡大

木造菩薩坐像
吾川郡仁淀川町養花院所蔵
像高 25.7 ｃｍ

10. 古代から受け継ぐ日本鶏
－天然記念物・土佐地鶏－

日本で最初に鶏の記述が出てくるのは、古事記(712年 稗田阿礼)。「日の神である天照大御神は弟、須佐之男命の傍若無人が恐ろしくなり岩屋に身を隠した。その結果、天上界、地上界は闇夜に包まれ、悪神や悪霊が暗躍、禍が発生し始めた。そこで高天原の八百万神々が話し合い、八尺瓊勾玉の音色、幣飾り、八咫鏡のきらめき、天宇受売命の踊りに祝詞を唱え、日光を呼び悪神・霊を追い払う長鳴鳥(鶏)を集めて鳴かせるというお祭り騒ぎを催した。この賑やかさに、天照大御神が何事かと戸を少し開けたところを引っ張り出した」という神話、皆さんご存知、古事記概要の一節です。

現在、長鳴鳥(鶏)といえば、東天紅、唐丸、声良の３鶏ですが、この時代背景を考えれば、地鶏であろうと推測されます。

地鶏は日本最古の鶏とされ、現在わが国では土佐地鶏のほか岐阜地鶏、三重地鶏が有名で、なかでも土佐地鶏は遺伝的に鶏の先祖である赤色野鶏に最も近く、形態的にもよく似ているといわれています。同鶏はフィリピン、カンボジアなど東南アジアが故郷で、日本への伝播は、中国大陸から朝鮮半島を経て北九州へ向かう一方、フィリピン方面から島伝いに南九州へと北上する２つのルートが、そして、時期は弥生時代と考えられています。その頃造られた、南国市田村遺跡から鶏の遺物はまだ、見つかっていません。しかし、次の古墳時代、岡山県、愛媛県の遺跡に鶏の埴輪が出現しました。このことから、当時、瀬戸内海を渡り愛媛県あるいは香川県を経て、稲作文化と共に高知県へも入ってきているのではないかと想像を膨らませています。

日本最古の書物、古事記による日本のはじまりに関わる鶏が高知県原産の土佐地鶏であるとすれば同鶏は本県、いや日本の鶏の元祖です。

この鶏、土佐小地鶏ともいわれ、３地鶏の内最も小さく、体重は雄で概ね 700 g、矮鶏くらいの大きさです。現在、活躍している実用・愛玩鶏の土佐ジロー、プチコッコの開発に使われました。

この価値ある小さな巨鶏は、天然記念物に指定されており、高知県日本鶏保存会では、約 100 羽(2016.12 調べ)飼っています。特別天然記念物の長尾鶏を始め、東天紅など８種の日本鶏を原産とする本県において、古来から延々と飼育され現在まで続いてきたであろうこの貴重な鶏を絶やさず、後世につなげたいものです。

元高知学園短期大学　　平岡　英一

土佐地鶏(ヒヨコ)

土佐地鶏(親)

11. 津野町の文化財
－吉村虎太郎邸と芳生野集落の原風景－

勤王の志士吉村虎太郎は、最初の土佐脱藩者であり、坂本龍馬をはじめ多くの志士たちに影響を与えた人物です。彼の生家跡地に建てられ、平成 27 年 6 月に完成した吉村虎太郎邸は、残されていた記録メモをもとに、間取りが忠実に再現されています。また、県指定を受けている門構えは、往時を偲ばせる風情となっています。

吉村虎太郎邸では、虎太郎の足跡に関する資料のほか、重要文化的景観のガイダンス施設として、四万十川流域の里山の風景に関する写真も紹介しており、平成 29 年（2017）3 月から平成 31 年（2019）3 月まで開催の「志国高知幕末維新博」の津野町会場としても注目を集めています。

吉村虎太郎邸がある芳生野という集落には、四万十川の裏源流と呼ばれる北川川を挟みながら、津野山古式神楽が奉納される諏訪神社やかつての往還、茶堂など人々の協力で守り続けられてきた多くの歴史遺産が根強く残っています。

中でもお薦めは、集落の生活道の一部として使われてきた早瀬の一本橋です。沈下橋の原型であり、川の増水により橋板が外れた際には、地区の人たちによって復元され続けているのが特徴で、人々の思い入れも強い場所であり、多くの観光客が訪れています。

昔ながらの山村の面影を残している里山の景観を、時代を動かした偉人ゆかりの地としても多くの人たちに楽しんでいただけるよう、これからも大切にしていきたいです。

津野町教育委員会生涯学習課　溝渕　敏彦

吉村虎太郎邸

吉村虎太郎

早瀬の一本橋

芳生野集落

12. 岡本弥太関係書簡大量に見つかる
－弥太没前・没後期の一級資料群－

高知の近代詩を語る上で、詩人岡本弥太は最も重要な人物で、明治 32 年に香美郡香我美町岸本に生まれました。弥太の生きたこの時期は日本の近代詩の確立期にあたり、日本の詩壇の隆盛期でもありました。昭和 7 年に生前唯一の詩集「瀧」を発表し、全国的に高い評価を得ます。地元高知（夜須・赤岡・前浜・府内）で小学校の教員をしながら、地方・中央の各同人誌・詩壇に次々と作品を発表しますが、昭和 17 年 12 月 2 日、43 歳の若さで永眠します。

平成 28 年秋、香南市文化財センターにより香南市香我美図書館に所蔵されている「岡本弥太関係資料」の確認調査を行ったところ、160 点を越す書簡類などが見つかり、そのほとんどが新確認資料であることが判明しました。これらの書簡群は、平成 11 年、岡本弥太生誕 100 年にあたる年に、弥太と親交の深かった郷土史家、故橋詰延壽氏の旧蔵資料として香我美町が寄贈を受けた資料でしたが、本格的調査はなされていませんでした。

これらの資料は一括して橋詰氏が保管していたもので、

1．生前の弥太宛書簡
2．弥太没後の遺族宛書簡
3．弥太自筆の橋詰氏宛書簡
4．その他の弥太自筆書簡
5．橋詰氏自筆の弥太関係原稿類等

に大別されます。

その中で、大半を占めるのが没前から没後の弥太宛書簡で、昭和 15 年から 17 年のまとまった資料群で、詩友や教員仲間、教え子など多彩な顔ぶれが見られます。

小野十三郎ら全国的に知られた詩人や、親交の深かった岡山県の詩人間野捷魯のほか、高知出身で満州に渡った詩人で島崎曙海、川島豊敏、『日本詩壇』の主宰者である吉川則比古からのものも含まれています。こうした交友関係を如実に物語るのみならず、これまで不透明だった「弥太渡満」にかかる重要なやりとり書簡、弥太没後の遺族の動静にかかるもの、文人のみならず教育関係や芸術に関する親交関係までも垣間見ることができます。

今年は弥太が亡くなって 75 年の年にあたります。全国に誇りうる土佐の代表的詩人、岡本弥太の事績を風化させてはなりません。昨年 12 月 2 日（命日）には、地元香我美町月見山の詩碑の前で、高知高専の生徒さんによる弥太作詞の「わが涙」歌唱披露や、記念植樹も行われました。

香南市文化財センター　濱田　眞尚

確認された岡本弥太の書簡類

高知高専の生徒さんによる歌唱披露

13. 第58回中国・四国ブロック民俗芸能大会

第 58 回中国・四国ブロック民俗芸能大会

平成 28 年 11 月 20 日（日）、高知県立県民文化ホール（オレンジホール）において「第 58 回中国・四国ブロック民俗芸能大会」を開催しました。

この民俗芸能大会は、中四国地方の各地で伝承されている貴重な民俗芸能を鑑賞することによって、民俗芸能の保存と伝承に役立てようと、中四国各県の持ち回りで開催されてきました。本大会で披露された芸能は次のとおりです。

蔵田八幡宮の麒麟獅子舞（くらたはちまんぐう　きりんししまい）	鳥取県鳥取市
井野神楽（いのかぐら）	島根県浜田市
備中神楽（びっちゅうかぐら）	岡山県井原市
みあがりおどり	広島県尾道市
切山歌舞伎（きりやまかぶき）	山口県下松市
宍喰団七踊り（ししくいだんしちおど）	徳島県海陽町
筒野虎獅子（つづのとらじし）	香川県さぬき市
両谷の獅子舞（りょうたに）	愛媛県伊予市
岩原神楽（いわはらかぐら）	高知県大豊町
花採太刀踊（はなとりたちおどり）	高知県日高村

当日は、中国四国地方の民俗芸能が一度に観られる、またとない機会であり、県内外からたくさんの観客の方にお越しいただきました。

また、同じ獅子舞、同じ神楽でも、それぞれの特徴の違いを比べながら観ることができ、その点でも大変興味深い大会になったと思います。

参加者のアンケートには「いろんな県の民俗芸能を一度に見られて満足しました」「各団体の皆様が伝統を守るために大変なご苦労をされていることがよくわかりました」という意見がありました。また、「各地の特色、歴史を感じ学ぶよい機会になりました。子どもたちにもっともっと伝えていきたいです」と、伝統的な民俗芸能を保存伝承していくことの大切さを感じていただいた一日になったと思います。

日本全国の民俗芸能に共通して、後継者不足という課題があります。みなさんにも、お住まいの地域、近隣の地域の民俗芸能に関心を持って触れていただくことを期待しています。

高知県教育委員会　武田　伸二郎

切山歌舞伎（山口県下松市）
子どもたちが主役クラスを堂々と務めました

両谷の獅子舞（愛媛県伊予市）
最後に獅子が退治されるという大変珍しい獅子舞です

岩原神楽（高知県大豊町）
爺（じい）の仮面をつけたひょうげ役が面白おかしくおどけます

花採太刀踊（高知県日高村）
真剣で切られたシデ（紙の総）が吹雪のように舞います

14. 文化財トピックス

日本遺産へ中芸は一つのストーリー
森林鉄道から日本一のゆずの道へ

中芸５町村は、平成 29 年度の日本遺産認定を目指し、「魚梁瀬森林鉄道」日本遺産推進協議会を８月５日に設立し、申請に向けた準備を開始しました。８月からは文化庁へ出向き、相談会を月１回のペースで、４回行っていただきました。また、10 月２日からは日本遺産認定に向けた連続講演会を文化庁の担当官など５名の方を招聘し開催しました。認定結果は４月に判明しますが、認定されれば高知県では四国遍路に続き２件目となります。

森林鉄道とゆず（花・果実）

平成 28 年度（第２期）
高知ヘリテージマネージャー・サポーター養成講座

県内の歴史的建造物の調査や重要伝統的建築物群保存地区等の修理・修景にかかる事業などに貢献でき、かつ将来予測される南海トラフ地震で、歴史的建造物が被災を受けた際には迅速な修理・修景などの保全を図ることのできる人材を育成する目的で、昨年度に引き続き開講しました。県内在住の建築士を対象としたヘリテージマネージャー（歴史文化遺産活用推進員）課程で 31 名、歴史的建造物に関心のある一般の人を対象としたヘリテージサポーター（歴史文化遺産活用支援員）課程で 12 名の参加がありました。

また、平成 28 年４月には修了生を中心に「ヘリテージ学団あっちこうち」が設立され、吉良川町の見直し調査などを担っています。

登録有形文化財

平成 28 年 11 月 18 日（金）に高知県関係では３件の建造物を登録するように文部科学大臣に答申されました。一つは高知市升形の織田歯科医院の主屋と塀で、主屋は塔屋付きの鉄筋コンクリート造２階建ての建物で、装飾豊かに仕上げとなり、近代洋風建築では県内初の登録有形文化財（建造物）となります。塀は鉄筋コンクリート造りで、主屋と共通した意匠となり、外面には、焼夷弾によるものといわれる痕跡が残っています。

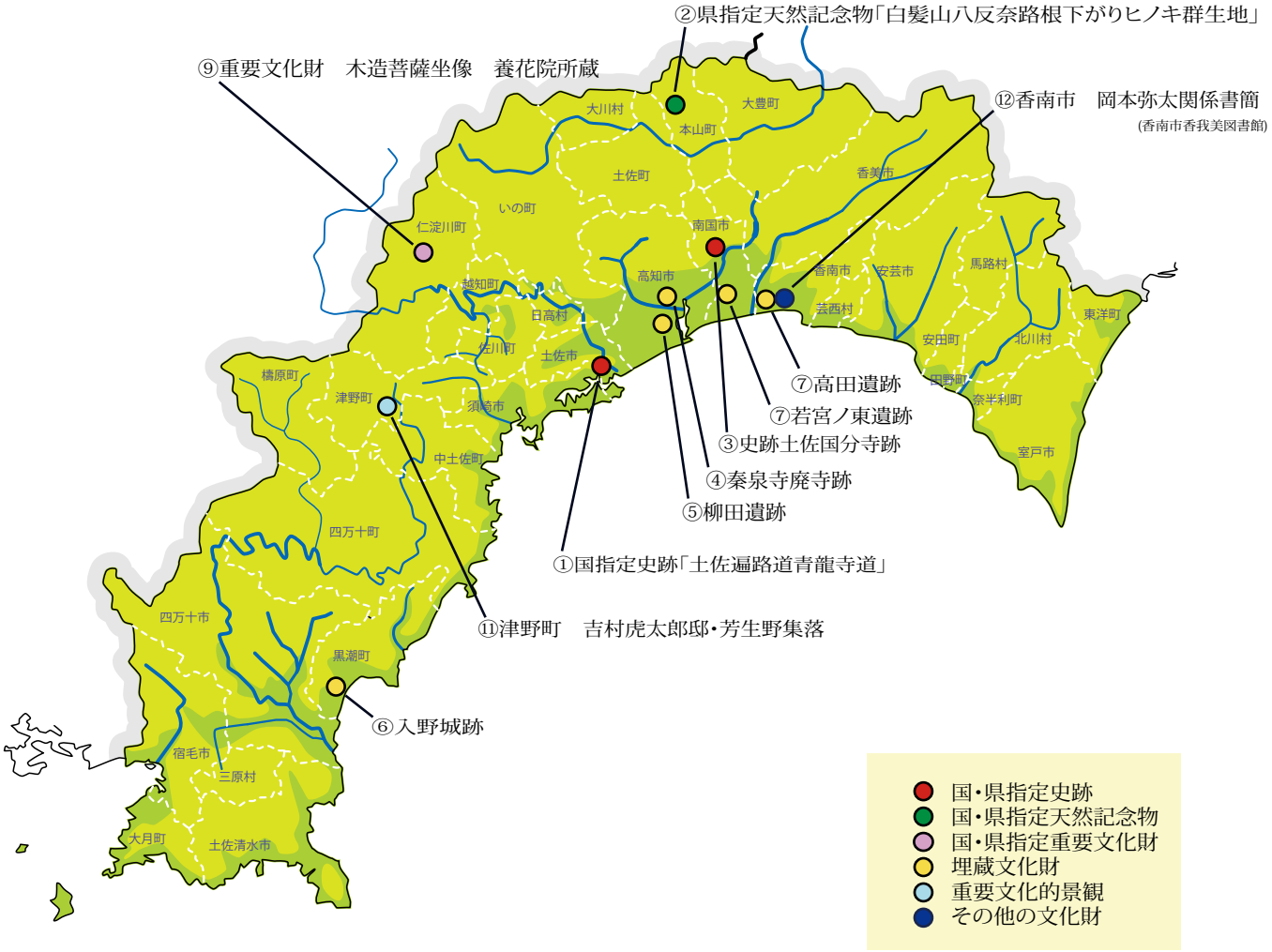
もう一つは香美市香北町大川上美良布神社の神庫で、３×２間、庇付の２階建ての土蔵です。腰壁は４面とも異なる土佐漆喰の鏝仕上げとなり、北妻の窓上部は、天邪鬼が唐破風状の庇を支え、鬼と雲の鏝絵で飾る特徴ある外観を見せています。

高知県教育委員会　廣田　佳久

織田歯科医院の主屋（上）
大川上美良布神社神庫（右）

全国ヘリテージ
マネージャーネットワーク
協議会運営副委員長
沢田氏による講演

掲載文化財位置図



みんなで守ろう文化財

文化財こうち　第３号

平成 29 年 3 月 31 日

編集・発行　高知県教育委員会文化財課

〒780-0850　高知県高知市丸ノ内 1-7-52

印　刷　　株式会社　飛鳥